

福島県喜多方市慶徳町新宮

灰塚山古墳第8次発掘調査

# 現地説明会資料



2017年9月17日

東北学院大学辻ゼミナール



# これまでの調査

## 平成25年までの調査成果

灰塚山古墳が前方後円墳であることは知られていましたが、昭和61年に実施された福島県立博物館による測量調査によって学術的に紹介されました。測量の結果、長61.2mで自然丘陵を利用して築かれたことが判明しました。

東北学院大学辻ゼミナールでは、平成23年から平成29年まで7年間にわたって発掘調査を続けてきました。平成25年までの調査では、灰塚山古墳の墳丘がもともとの地形を利用しながら築かれていること、後円部の上には江戸時代の礫石経塚が営まれていること、礫石経塚の下層に埋葬施設が南北方向に軸をほぼ揃えて二つ存在することが分かっています。

## 平成28年度調査成果

昨年、平成28年度の調査では、後円部中央の第1主体部と後円部東側の第2主体部の調査を行いました。

第1主体部は南北に長い木製の棺です。木の棺は長い時間の中で腐ってしまい残っていませんが、棺の置かれた痕跡が粘土上に残されており、全長約8m超、幅約1.6mの大型の棺だったことが分かります。古墳に用いられる木棺として最も大きいものの一つと考えられます。組み合わせ式の木棺と見えています。

棺の内部には副葬品が残されていました。副葬品は青銅製の鏡、ガラス玉を綴った腕飾り、堅櫛群、大刀1振りなどです。青銅製の鏡は小型仿製鏡と呼ばれるものです。東北地方には類例はなく、西日本を中心に似た資料が知られています。堅櫛群は、大型の堅櫛と大小の堅櫛を組み合わせた特殊なものを順次遺体の上に置いていった状況を示しています。堅櫛を供える儀式の様子を知ることのできる資料は日本中探しても他にありません。大変貴重なものです。



第1主体部



青銅鏡出土状況



大刀、堅櫛群出土状況

第2主体部は第1主体部の東側にほぼ軸を揃えて設置されています。平成25年度の調査では粘土が盛り上がっている状態で発見されました。この粘土を除去したところ、その下に板石を組み合わせている様子が確認されました。石組みの下から多量の鉄製の武器が発見されました。発見された武器は鉄製大刀2、鉄製剣1（木製の鞘に入った状態）、鉄鏃の束2、鉄鏃2などです。他に漆塗りの壺も2点出土しています。また、石組の下には石棺があり、大きな蓋でふさがれていました。

石組みの下で発見された石棺の蓋の上に多量の武器が並べられていました。鉄製大刀と鉄製剣は石棺の西側に切っ先を南に向けてならべて置かれ、鉄製剣の上に載った状態で剣、大刀と直交方向で鉄鏃が1束、剣よりも西側で剣と平行する方向で鉄鏃が1束おかれていました。鉄鏃は矢の先の部分ですが、置かれた時は矢羽や矢柄もあって矢の束の状態だったようです。これらは石棺室の中に被葬者を安置したあと、石蓋をかけたあとにささげられた武器と考えられます。遺体を葬った後に死者が守られることを願う儀式が執り行われたのでしょうか。これらの武器の特徴から第2主体部が設置された時期は古墳時代中期、5世紀後半と考えられます。



粘土で覆われた状態



石組み遺構検出



石組み遺構全体



石棺蓋石



石棺蓋石上鉄鏃束、大刀、剣（槍、戟？）出土状況

## 第8次調査調査概要

昨年夏の第6次調査の後、平成27年3月に第7次調査を実施し、第1主体部の構造を確認しました。今回の第8次調査では、第6次調査で確認していた石棺内部の調査を実施しました。

### 1、石棺の調査

石棺は5枚の板石により蓋をされていました。蓋石の重なり方から中央の大きな板石が最後に置かれ、その両側がその前、南北の両端が最初に置かれたことが分かりました。調査ではその順番とは反対に最後に置かれた蓋石から順番にはずしていきました。蓋石をはずすと、蓋石の内側は真っ赤に彩色されていることが分かりました。また、石棺の側石内部、底面も赤く塗られていて、死者は赤い世界の中に安置されていたことが分かりました。

蓋石をはずすと石棺の上部が見えてきましたが、側石の上には粘土が貼られていて、粘土の上に蓋石が置かれていることが分かりました。側石の上に貼られた粘土の上から小型竪櫛が出土しており、側石を置いた後粘土を貼る際に朱の粒を巻いたり、竪櫛を置くなどの手順が踏まれていることが分かりました。

石棺は南北方向に設置されていました。石棺は北側の板石を二重にし、東西の側石を3枚、南側を1枚で構成しています。側石の外側には側石の継ぎ目を補うように板石が立てられていました。石棺は全体に頭蓋骨が置かれた北側が高く、南側が低く作られていました。外側で長さは2m20cm、最大幅85cm、内法で長さ186cm、幅43cmを測ります。深さは20cm前後です。西側の北側石は割れており、東西ともに中央付近の側石は内側に傾いています。また、南側の底石は南側に向けて傾斜しています。このような状況は石棺に大きな力が加えられ、ゆがんだ状態であることを示しています。

石棺の外側には幅20～30cmの白い粘土の帯が観察されます。石棺を設置した後に外側に充填された粘土と思われるが、詳細は今後の調査で明らかにしたいと思います。



石棺開封調査



中央の蓋石をはずした状態



赤く塗られた蓋石下面



石棺全景

## 2、石棺内出土人骨、遺物

石棺内から、ほぼ全身にわたる人骨が1体分と剣、鉄刀が出土しました。

人骨の出土部分は頭骨、上顎骨、下顎骨、鎖骨、肩胛骨、上腕骨、腰椎、寛骨、

恥骨結合部、大腿骨、脛骨です。肋骨も左右3点出土していますが、正確な位置が不明なので下図には示しませんでした。

頭骨は右側に転げた状態で顔は西壁に向いています。当初の状態ではなく、動かされたと見られます。昨年粘土の被覆を取り外した後に小動物（おそらくは鼠？）が出入りしているようで、動物によって動かされた可能性があります。また、頭蓋骨内に木の葉やビニールの一部が持ち込まれている様子が観察され、小動物が頭蓋骨内部を巣としていた可能性があります。上顎には1本の歯が残されていました。また、下顎の骨は上下が逆さまの状態でした。下顎にも歯が残っているようです。

上半身は鎖骨、肩胛骨、上腕骨、腰椎が残っていました。おおむね本来の位置を保っているようです。肋骨も複数残っていましたが、正確な位置はわかりません。腕の下半分にあたる橈骨、尺骨、手首から先の部分は残されていませんでした。

下半身は腰の一部にあたる寛骨と大腿骨の一部、脛の部分にあたる脛骨がありました。脛の外側にある腓骨と足首から先にあたる部分は発見されませんでした。大腿骨の一部と右側の頸骨は明らかに動いていました。頭骨と同じく小動物によって動かされたのかもしれない。

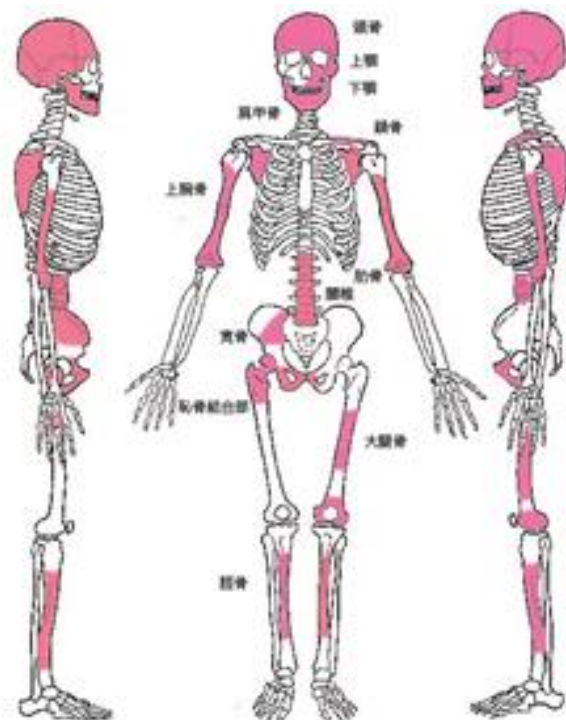
出土人骨は部分的な乱れはあるものの、図に示すように人体を構成する主要な部分があり、ほぼ全身の様子が分かるものでした。奈良貴史新潟医療福祉大学教授のご教示によれば、人骨は男性の可能性があり、頭蓋骨の縫合の様子などからから見て比較的高齢である可能性が高いとのことでした。

棺内からは人骨の他に鉄製武器が出土しています。

人骨の右側にあたる棺西側からは鉄剣が出土しています。出土位置からみて被葬者にとって大切な武器だったのでしょう。長さは50cm程度です。

頭骨の左上、棺内東北角から鉄刀が1振り出土しています。長さは30cmを越える程度です。

第2主体部出土人骨部位  
(着色部分が出土部位)





肩胛骨、上腕骨、腰椎、肋骨

第2 主体部出土人骨



頭蓋骨部分



鉄劍出土状況



# ま と め

平成23年から7年間継続した灰塚山古墳の発掘調査で、灰塚山古墳が全長61mを越える大型前方後円墳であること、後円部には二つの棺が埋納されていたこと、古墳が古墳時代中期に築かれていたことなどがわかりました。

## 1、古墳の規模、特徴

古墳時代中期の古墳は東北地方全体でも比較的少なく、会津盆地では大型の中期古墳は知られていませんでした。灰塚山古墳が中期古墳と判明したことはこれまでの会津盆地の古墳時代の動向を考える上でまったく新しい発見といえます。これまで、会津盆地では古墳時代前期には大型古墳が多数築造されるが、中期には大型古墳はないと考えられてきました。私は中期には会津盆地は大和王権から離脱したのではないかと考えてきました。灰塚山古墳の調査成果はこれまでの理解を覆すものです。私もこれまでの考え方を変え新たな会津盆地の歴史像を考えなければなりません。

灰塚山古墳はの規模は東北地方の中期古墳の中では宮城県名取大塚山古墳、兜塚古墳について3番目にあたります。福島県内では近い規模が推定されている古墳もありますが、まず最大といってもいいでしょう。

古墳の姿、形は名取大塚山古墳、兜塚古墳などとは大きく違い前期の特徴を残していません。東北地方でこれまで知られている中期古墳とは違う系譜を考えなければならないと思います。

## 2、棺と出土遺物

後円部頂上から対称的な二つの棺が発見されました。

第1主体部の長大な木棺は古墳の中心軸上にあり、この古墳の主が埋葬されたと考えられます。全長8mを越え南北端が傾斜し、幅1.6mを測るこの組み合わせ式木棺と同様の例は今のところ他に探せていません。きわめて珍しい例です。副葬品には大刀を除いて武器武具はいっさいありません。これまでの例で見ると女性である可能性がありそうです。また、出土した堅櫛群は遺体に供献されたものです。このような例は今のところ他で確認できません。出土堅櫛群は、遺体に供献したことを示す例です。保存状態も良く、日本全体で最も良好な例で、きわめて貴重です。

第2主体部の石棺は粘土で密封され、石組み遺構で覆われた特徴的な構造をもっています。蓋石上で発見された沢山の武器、武具は死者に供献された例として貴重です。また、灰塚山古墳の主はこのような豊富な鉄製品を入手できる立場にあったことを物語ります。大和王権中枢との関係を思わせます。また、石棺の蓋石の上と棺内からほぼ武器だけが出土しました。このようなあり方は考古学の立場から男性の被葬者を考えさせます。後述べるように人骨からも男性の可能性が考えられますので、第2主体部には男性が葬られていたのでしょうか。第1主体部に埋葬された女性とともに会津盆地の中心勢力を率いていたのだと思います。第2主体部は5世紀後半の時期だと考えられます。灰塚山古墳の南東1.6kmにある豪族居館古屋敷遺跡はまさに5世紀後半に営まれていますので、第2主体部に埋葬された男性は古屋敷遺跡に住んで人々を統率していたのだと考えられます。

### 3、出土人骨

第2主体部からほぼ全身の骨が発見されました。

古墳時代の前期、中期を通じて大型古墳の被葬者の全身骨が出土するのはきわめて希なケースです。東北地方ではまったく類例がありません。関東地方でも茨城県三昧塚古墳から下半身の骨を中心に出土した例が比べられる程度ですが、全身ではありません。視野を全国に広げても私の知る限りでは中期で広島県三ツ城古墳、前期では熊本県向野田古墳などが挙がる程度です。灰塚山古墳第2主体部出土人骨は、古墳時代支配者の全身骨が出土した東日本で唯一の例だと思えます。人骨の出土例を直径20m程度の古墳まで広げれば福島県郡山市正直27号墳、山形県戸塚山127号墳などの例があります。これらは集団内の有力者の骨と見られます。

それでは支配者の全身骨からどんなことが分かるのでしょうか。

まず、支配者の性別、年齢、身体的特徴、病歴などが骨の観察から分かります。また、今後C14年代測定法、DNA分析、窒素同位体分析など様々な分析を行えば被葬者の死亡年代、どのようなヒトのグループなのかが分かる可能性が高いのです。またひょっとしてどのような物を食べていたのかも分かるかもしれません。さらに顔面部分の残りの状態が良ければ被葬者の顔を復元できるかもしれません。これまでのに知られている良好な全身骨格は古い時代に発掘されており各種の分析もあまり行われていません。第2主体部出土全身骨は最新科学を用いて古代王者の具体的な姿にせまることのできる希有な資料なのです。

#### 最後に

7年間にわたる発掘調査により、喜多方市灰塚山古墳が古墳時代中期の大型古墳であることが分かりました。古墳の姿、埋葬された棺と副葬品、埋葬された人物の骨格などから会津盆地を支配し、喜多方に本拠をおいた支配者の姿を知ることができました。今後は更なる検討、分析をすすめ会津盆地を素材に東北地方の古墳時代の歴史を解明していきたいと思えます。

#### 謝辞

調査にあたり、土地を所有される小汲康浩区長をはじめとする新宮区の皆様には調査の実施にご快諾いただきました。また、喜多方市教育委員会には調査の遂行に多くのご配慮をいただきました。植村泰徳、渡辺展好、片岡洋、山中雄志、田部成彦、上野正典、後藤直人、田部文市、渡辺和男の各氏には調査に多大なご協力をいただきました。株式会社ふたばの皆様には3次元計測、ドローンによる空撮を実施していただきました。近輝夫氏、近ノリ子氏には宿舎をご提供いただきました。皆様に心から感謝申し上げます。



灰塚山古墳全景ドローン撮影写真（株式会社ふたば提供）



後円部墳頂第1、第2主体部（株式会社ふたば提供）